

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「共助・自助の取組を全県に広げるために」

日 時 平成27年6月14日（日） 午後3時から4時まで

場 所 長野県総合教育センター 講堂（塩尻市）

目 次

- | | | |
|---|------------|------|
| 1 | 開会 | P 2 |
| 2 | 意見交換 | P 2 |
| 3 | 知事 結びのあいさつ | P 25 |
| 4 | 閉会 | P 26 |

進行役 矢守克也氏（京都大学巨大災害研究センター長）

パネラー 秋本敏文氏（公益財団法人日本消防協会会長）

〃 鎌倉宏氏（元白馬村堀之内自主防災組織会長）

〃 武儀山真史氏（南木曾町消防団長）

〃 吉村幸代氏（長野県防災会議委員、元松本市寿台公民館長）

阿部守一（長野県知事）

この県政タウンミーティングは、「地域の防災・減災を考えるシンポジウム」のパネルディスカッションと兼ねて開催しました。

1 開会

【消防課長 西澤清】

大変お待たせいたしました。ただいまからパネルディスカッションを始めます。テーマは、「共助・自助の取組を全県に広げるために」でございます。

まず、コーディネーターの方をご紹介します。先ほど基調講演をいただきました、京都大学の矢守克也先生です。続きましてパネラーを紹介いたします。舞台に向かって左から、長野県知事阿部守一でございます。続きまして日本消防協会会長秋本敏文様でございます。消防庁長官も務められまして、平成15年から日本消防協会理事長、24年からは会長に就任をされました。全国の消防団に精通する立場からご発言をいただきます。

続きまして、先ほど事例発表をいただきました、元白馬村堀之内区自主防災組織会長鎌倉宏様でございます。同じく事例発表をいただきました、南木曾町消防団長武儀山真史様でございます。最後に、元松本市寿台公民館長吉村幸代様でございます。元公民館長として、住民を巻き込んだ地域防災の進め方や、女性の立場から災害時の要援護者への対応等についてのご発言をいただけたと思います。また現在、長野県防災会議の委員も務めていただいております。

なお、このパネルディスカッションでございますが、県政タウンミーティングを兼ねております。後ほど会場の皆様からのご意見をいただく機会も設けますので、是非ご参加いただきたいと思います。それでは、ここからの進行は矢守先生にお願いいたします。

2 意見交換

【京都防災研究所巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

では、これより1時間という、それほど長い時間ではないのですが、今日のシンポジウムの締めくくりといたしまして、パネルディスカッションを開始したいと思います。私、矢守がコーディネーター役を務めさせていただきます。よろしく願い申し上げます。

パネルディスカッションでは、まず自己紹介を兼ねまして、お一方ずつお話を伺っていこうと思っております。テーマを2つ掲げておまして、第1が「地域防災力の向上にとって大切なこと」というテーマです。そして2番目のテーマとして、「消防団の充実強化」というテーマを掲げております。

まず、第1のテーマについて、お一方ずつ意見を伺っていこうと思うんですけれども。言うのを忘れたんですけれども、パネルディスカッションで何と呼ぼうかというふうに、お名前を先ほどご紹介をしまして、もう全員「さん」付けでいいんじゃないかということになりましたので、知事も「さん」付けということで、皆さん横並びでやりたいと思

いますのでよろしくお願いします。

ご報告をいただきました鎌倉さんと武儀山さんには短めに、そのほかのお三方にはちょっと長めに、自己紹介を兼ねて、まずは最初のテーマですね、「地域防災力の向上にとって大切なこと」というテーマで、それぞれのお立場から一言ずついただきたいと思えます。では阿部さんからよろしくお願いいたします。

【長野県知事 阿部守一】

それでは私のほうから、ちょっと時間が限定されているので、簡単にお話をしたいと思います。まず、私も県知事という立場で、この災害対応に関わっている中で感じているのは、冒頭も少し申し上げましたけれども、やはり、いわゆる「絆」、「ネットワーク」、「支え合い」、そうしたものの重要性であります。これは、先ほど武儀山さん、鎌倉さんからそれぞれの、白馬村、南木曾町でのお話がありましたけれども、私から申し上げたいのは、地域での支え合い、助け合いということは、もちろん最も重要だと思いますが、それだけではなくて、関係機関、警察・消防・自衛隊であったり、あるいは我々行政であったり、そうしたさまざまな機関も含めた顔の見える関係づくり、ネットワークづくりというのが、いざ災害のときの被害の軽減にとって大変重要だと思っています。

そういう意味で、今日はちょっと私が県の代表者みたいな形になっているので、県が何を考えているかということも、少しご理解いただくことも大事だと思います。県が災害対策本部をつくったとき、私が本部長になりますので、私はどんな感覚で仕事をしているかというのを直接お話しする機会がなかなかないので、ちょっと5分では語り切れないんですが、ざっとまずお話ししたいと思います。

まず、私は県の職員にも言っていますけれども、いざ災害というときには、空振りを恐れずに対応しよう。もう何かここまでやっちゃって大丈夫かな、みたいな話だと、どうしても後手後手の対応になってしまいかねないので、もう空振りを恐れずにやろうということで考えています。そういう意味で、例えば自衛隊の皆さんへの要請であったり、あるいは緊急消防援助隊への要請であったり、もちろん条件が整っているかどうかというところは判断させてもらいますけれども、市町村長の皆さんからお話があれば、もう基本的にうちのほうであまりとやかく言わずに、地域の声を最大限尊重して要請の判断をしていきたいと思っています。是非、そういう意味では、市町村の皆さんが、今日、中川村の曾我村長もお越しになっていますけれども、しっかりと意思疎通を普段からしておきたいと思っていますし、私、携帯電話を二つ持っていますけれども、こっこの公用の携帯のほうには全ての市町村長の皆様方の携帯番号が入っていますし、私の移動用に使っている公用車は衛星携帯も入っていますので、現場レベルでの情報共有ももちろん積極的にしていただきたいと思えますけれども、市町村長の皆さんと、あらゆる災害のときに、いつも状況確認、そして情報共有させていただいているところでありませう。

そういう関係でもう一つ申し上げれば、そのときに市町村長の皆様に私が言っているのは、県としてできることは何でもやるから言ってくださいという話をしています。これは、正直言って県の災害対策本部、あるいは県知事としての私は現場の状況がよくわからないことだらけであります。わかるほうが不思議なのかもしれませんけれども。県庁の中にいる、あるいは県庁以外のところに私がいても、災害が起きましたと。確かに表面的に、人的被害が今どれぐらいだとか、道路がどうなっているかとか、そういう報告は来ます。だけど、それはあくまでも数字で表れている状況でありまして、実際の現場がどうなっているかということは、やはり現場の皆さんが一番よくわかっていると思っています。

そういう意味で、我々は皆様方、現場の皆さん、あるいは市町村長、市町村の皆さんが、これが必要だということには、基本的には全力でお応えしていきたいと思っています。時々、こんなことまで頼んじゃって大丈夫かということで遠慮をされる市町村長の方も、若干、場合によっていらっしゃらないわけではないのでありますけれども、むしろ我々のほうでそんなのは応援できないことは応援できないって言いますし、だめならだめってはっきり言いますので、むしろ現場は、実はこれが困っているんだと、これが大変だということをどんどん上げていただくということが必要だと思っています。

それから、そういう意味で、直接的にはやっぱり現場の意思を尊重して、我々対応していきたいと思えますし、それからもう一つ、我々県の本部としていろいろ考えなきゃいけないのは、災害の直接的な部分だけではなくて、周辺の状態をしっかりとサポートしていくということも重要だと思っています。

例えば御嶽山の災害、あるいは神城断層地震でも風評被害の防止ということが、やはり直接的な災害の対応と併せて求められることかと思えます。もちろん市町村の皆さん、あるいは観光関係の皆さん方も一生懸命やってもらっていますけれども、やっぱり我々、広域自治体である都道府県が積極的にやっていかないと、なかなか十分発信しきれないというところもありますので、そういう分野。あるいは報道対応ですね。先ほど南木曾のお話とかがちらっとあったような気がしますけれども、例えば今年の御嶽災害のときは、報道の人たち、いわゆる通常の新聞・テレビだけではなくて、週刊誌的な方も含めて大勢のメディアの方がいて、現場、大変だと。そういうときは、去年は政府の現地対策本部も立ち上げられたんで、政府にも言って、メディアあてにもうちょっと実情を正しく報道するように、取材するようにと。被災されている方、あるいはご家族の方、非常に迷惑されているということもしっかり伝えて、そうしたこともメディアに求めたりしています。

そういう意味で、私は、先ほどから縷々いろいろお話が出ていますけれども、実際の災害対応は、本当に現場で臨機応変にやってもらわざるを得ない部分があります。ただ、我々県としては、その現場の活動を全力で応援しようと。言われたことがあれば、極力、例えば避難所の間仕切りみたいな話でも何でもいいんです。そういうことでも、ではほ

かから購入させようかとか、県の備蓄を使おうかとか、そういうことでやっていきますので、是非そういう意味で、現場で困ったことはどんどん県のほうに言っていただければ、できることは全力で行っていきたいと思っています。5分だとちょっとこれくらいで冒頭のお話は終わらなければいけませんけれども。

私、今、申し上げたのは、私が知事としてどんな思いでやっているかという話です。

是非、これは地域の中でも、あるいは広域単位でも、いろいろな関係者、もう全ての人が防災関係者だといっても過言ではないわけでありまして、それぞれの人たちがいつもどんな思いでやっているんだと、どんな支援ができるんだと、どんな協力体制を組んでいるんだということを、日頃から情報共有していただいて、お互いのネットワークをしっかりと作ってもらいたいということを、まず冒頭、私から申し上げておきたいと思えます。以上です。

【京都防災研究所巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございました。「絆」、「ネットワーク」、「支え合い」というキーワードを最初におっしゃっていただいて、そのいろいろな関係者の全員プレーの重要性というか、そういうことで締めくくっていただけたかと思っております。たくさんの論点をちょっと短い時間で恐縮でございました。また2番目、3番目の出番がございますので。

それを受けまして、それでは秋本さんから、特に最初のほうで、やはり関係機関との連携が必要だという阿部さんのご指摘もありました。そのあたりを踏まえて、一言いただければと思います。よろしく願いいたします。

【公益財団法人日本消防協会会長 秋本敏文氏】

日本消防協会会長の秋本ですが、私は、実は阪神・淡路大震災の直後に消防庁長官という仕事をしまして、そして緊急消防援助隊という全国の応援体制をつくるということをやりました。ですが、そのときに同時にみんながよく言っていたのは、緊急援助隊というよそからの応援というのは、地震がどんと来たときにそこにいるわけじゃない。それは地元の体制で何とか凌いでいかなきゃいけない。地元の体制が大事だということを何回も言ってまいりました。

先ほど阪神・淡路大震災で火災の話がありましたけれども、あのとき、神戸の市街地だけで60件火災がありました。通常ですと、あの話ばかりではありませんでしたが、消防団が消すんです。ですが、神戸の市街地の消防団は、火災は常備が消す、消防署が消すということで、ポンプを持たせてもらってなかった。したがって、まあどうにもならないという状態。ただ幸いにも、あの日はほとんど無風状態でした。ですから、長田地区以外は大幅な延焼ということにならなかったんですけれども。あれが本当に普通の北西の季節風があるときだったら、消防団が手も足も出ない、常備消防は車が足りないというだけじゃなくて、地震で道路はもう通れないですから、全く打つ手がないというよ

うなことがありました。これではだめだと。

もう一つ、木造家屋が倒れて下敷きになって亡くなった方、これがたくさんおられた。6,400人亡くなりましたけど、そのうちの8割はその家屋倒壊などの下敷きであろうと言われております。もしも地元の消防団がある程度の救助機材を持って、地元の人たちと一緒に助けるということができたら、もっと助かったんじゃないかというようなことも思います。したがって、緊急消防援助隊という全国の応援体制はつくる。ですけども、地元の体制をきちっとしなければいけないというので、それをみんなにわかってもらうための30分もののビデオをつくって全国に配ったりしましたけれども、そっこのほうはあまり進みませんでした。

そして緊急消防援助隊の装備はもう格段に向上しました。世界一と言ってまず間違いないと思います。そういう状況の中で、東日本大震災を迎えました。本当に2万人の方が亡くなり、消防団員が198人、消防職員が26人、殉職するということになってしまいました。なぜああいうことになったのか、もっと何とかならなかったのか、みんな同じ思いを持ったと思います。その中の大きな一つ問題になるのは、情報関係ということがあると思います。

あの大きな地震があったときに、最初に気象庁が出した津波の警報は、3メートル、6メートルでありました。これが多くの方々の印象をまず変えたと思います。大したことはないというのがあったと思います。それから現場でも情報というのが大混乱でありました。消防団の皆さんはほとんど無線を持っていない。しかも地元には消防団しかいない。そして避難誘導をするというときに、どの程度の津波が来るんだぞということについて、正確な情報を伝えながら避難誘導ができたかどうか。後でアンケートをやりますと、ほとんどの消防団員はそういう情報を持ってないままに避難誘導をするということになってしまった。

それからもう一つ、今、知事が現場の情報のことのお話がありました。現場がどうなっているかということについての情報、これも東日本はうまくいかなかったと言ってもいいと思います。それをもっと何とかできないか。それは消防団の装備について、無線機といったようなものをどこの団でも持って、ただ命令を受ける受令機というんじゃないで、情報発信ができる無線機を持てるようにしなければいけないと。私は数年前から、その消防団の活動という中で、情報発信者としての役割というのをもっとできるようにしていかなきゃいけないと思っています。

この間、鹿児島島の口永良部島で噴火がありました。あそこの島には消防団しかいない。消防団がいた。そして安否確認、避難誘導をして、みんな助けました。ですが、あれは一体どうなっているんだろうと、情報が入らなかった。それは何でだと。あそこの消防団も無線関係の装備はどうなんだろうと。後で確認をしたら、個人の携帯しか持ってない。無線機は持ってない。あのとき、もし無線機があって、今、島の状況はこうだということを送信してくれる、それは消防団しかない。第一次の情報発信者として消防

団が本当は役割を果たせたんじゃないのか。そしてもしも、そのときにけが人が出たということになると、こういうけが人がいるぞという第一報を消防団が発信して、そしてそれにあわせて救助部隊がすぐ飛んでいくといったようなことだってあったかもしれない。だからこれから先、どこでもそうですけれども、消防団が情報発信者としての役割を果たすことができるようにするというのが、恐らくこれからのいろいろな対応の中でもものすごく大事になってくるんじゃないかと思います。

そういうような経験をして、それで日消（※日本消防協会）として東日本大震災後に新しい法律をつくるべきだということを言いました。そのときに言いました法律の名前は「地域総合防災力整備推進法」、そういう法律をつくって地域全体として守っていく、それを進めていくような法律をつくるということを言いました。しばらく誰も相手にしてくれませんでした。一昨年、消防団を中核としたということで法律ができました。法律ができてよかったけど、それで何もしないでは何もなりませんので、去年8月、東京有楽町の国際フォーラムというところで、日消が主催ですけれども、消防関係以外の人たちにも、とにかくできるだけ声をかけて、そして160ほどのいろいろな団体に賛同、参加してもらいまして、1,500人ぐらいの人に集まってもらって、初めての国民的大会をやりました。

そこでは全国各地でこういうような活動をしているんだということの紹介もしてもらいました。その中には、先ほどお話がありました高知県の黒潮町の消防団の人にもやってもらいまして、5分で34メートルの津波が来ると言われたと。初めは、お話があったように、みんなもうどうにもならんと思ったんですけれども、いや何とかしなきゃいかんというので、消防団が中心になって今もいろいろなことをやってきております。そういったようなことを国際フォーラムでみんなの前で言ってもらいました。その大会は初めての大会です。安倍内閣総理大臣も急遽出席をして力強い激励をしていただきました。

そういうことをやって、大会で、あっこれで終わりということじゃだめだなど、何とかこれを発展させなきゃいけないと思っておりまして、長野県で、今日のこのシンポジウムをやると。一種の県民大会をやるということを聞きまして、これは全国の大会は去年の8月が最初、地方で県単位の集会はこれが最初です。私はもう是非これは出させていたいただきたいと思いました。これは大変意味のあるシンポジウムだと思います。

そしてそういうことをやりながら、私どもはいろいろなことを、今、進めておりますけれども、総力を結集するという意味で言いますと、消防署・消防団・警察・自衛隊だけじゃありません。一般の地域の皆さん方、地域の皆さん方に本当に参加していただくためにはどういうことをやるかと。例えば少年消防クラブの育成、女性防火クラブの育成、そういうこともやる。

それともう一つ、全体の情報を提供するというのをやろうと思ひまして、この4月から「地域防災」という情報誌を出しました。国の動き、地方の動き、それから全国各地の動き、これらを、わずか36ページですけど、薄っぺらなものですけど、そして金が

ありませんので、2カ月に1回しか出せません。ですけど、この中にはいろいろな情報が入っています。これ、4月号で出してから反応を見ますと、この中身、わかりやすいと。何しろこれ、写真入りで見開き2ページでやっていますので、あんまり長いこと読まなくてもいい。この中には、白馬村のことも報告を入れていただいています。

こうやって全国各地での動きなども、これを見るとある程度わかるぞというような便利のいいものを4月号から出しました。今度は6月、その次は8月、こういったようなものも皆さん方の目に触れるようにできるだけ努力をして、全体の情報を持ちながら、それぞれの地域で連携しながらやっていただくというように、私どもとしてもこれからまた引き続いて努力していきたいと思っております。以上です。

【京都防災研究所巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。大変力強いお言葉をいただきまして、また秋本さんにもいろいろなご意見をいただいたんですけれども。私なりには、特に国レベルで緊急援助体制の整備をなさってこられた秋本さんから、それでもなお、地域の足元の力が大事であるというご指摘をいただいた点は、とても大事なことではないかなというふうに感じました。ありがとうございます。

それでは、続きまして鎌倉さんに、先ほど言い残されたこととか、あるいは、今、阿部さん、秋本さんからお話があったようなことに対するコメントでも、応答でも結構なんですけれども、ご自由に一言またいただけますでしょうか。お願いします。

【元白馬村堀之内自主防災組織会長 鎌倉宏氏】

私もそうだったんですけれども、実際に自分の身の回りでああいったことが起きないと、他人事でしか思っていないと思うんですよ。自主防災もそうなんですけど、やっぱり自分のことだからこそ真剣でそういったことに取り組める。私が被災に遭ったからそう言うわけではありませんけれども、できるだけやっぱり自主防災、そういった力というのは大きいんで、皆さん真剣に取り組んでいただければと、そんなふうに思います。

それと防災訓練について、やっぱりちょっとつまらないという意識があるんで、マンネリ化しやすくなります。私のところは、先ほどの事例発表で見ていただいたように、ああいう訓練をしながら、焼肉で人を釣ったというふうに思っております。それで50人ぐらい集まっていたいただいたんですけれども。そういった形で、もう一つ何かをやるということで皆さんに集まっていたいただいて、訓練等々を重ねていくと、そうすると何かあったときには役に立つ、そういうふうに思っております。

【京都防災研究所巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。時間が大分押してきたので、すごく手短かにまとめていただいて、司会者としてはものすごく助かりました。ありがとうございます。

そんなことを言いながら私がしゃべっちゃいけないんですけど、訓練と言えば、大槌町というところがありますよね。あそこの津波避難訓練で、私、聞いたことがあるのは、それも訓練の工夫だと思うんですけど。皆さん、「こすばる」という言葉、ご存じですかね。私も初めて聞いたんですけど。「こすばる」というのは、どうも避難を嫌がるとか、そういう意味らしいんですね。「わしは逃げんでもええ」と言って。そういう「こすばる老人」と呼ばれていましたけど、そういう役をする人をちゃんとつくって、説得するという訓練までされていました。実際、3.11のときにもそういう「こすばる老人」にすごく手を焼いたという消防団の方が多かったんだと思うんですね。何か訓練をすごくリアルにするための、経験された方ならではの工夫かなと思って。もちろん焼肉とか、お祭りとか、そういう楽しいことと避難訓練、楽しいと言っではいけないですけど、そういうものと防災を結びつけることも大事なかなと思いました。ありがとうございます。

それでは武儀山さんに、ちょっと時間が足りなかったような気がしますので、是非補ってください。はい、お願いします。

【南木曾町消防団長 武儀山真史氏】

防災力の向上ということで、私たち消防団としては、毎年、恒例でやっている防災訓練だとか、そういう操法の訓練、または機械・器具の点検とかはやっております。そこに、去年、その前の団長の時代で、私もそれを引き継いでおりますが、地域の皆さんを巻き込んだ防災訓練、それは町が主体になるのではなくて、各分団のその地域で、区長さんと私たちで連絡を取り合って、例えばそういう放水訓練だとか、避難経路の確認だとか、またはそういう例えば基地、ここが避難できない場合はどこに逃げましょうというような確認のことも実際にやっております。昨年、災害が起きて、そういうふうな意識も、住民の方、すごく高くなってきておりますし、そういうような要望も実際には、今年も消防団のほうに上がってきております。

また、先ほども述べましたが、災害のときに安否確認がすごくできたというのは、年に2回、火の元点検というのをやるんですけど、各1軒1軒を私たち消防団員が回って、一人暮らし、または高齢者の、家族で住んでいる方はちょっとプリントを手渡す程度なんですけど、一人暮らしとか高齢者の方には実際に声をかけて、火の元に気をつけてくださいとか、何かあったら連絡をくださいとか、こういうふうに声をかけて、その家の状況、またはその一人暮らし、また高齢者の方の状況も把握すると同時に、そういう意識を持ってもらうという活動もしております。そういうのがやっぱり、防災力の向上につながるのではないかと考えております。

【京都防災研究所巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。火の元点検ですね、私も自分の研究室の学生と、ある地域の家具固定、お宅に上がり込んで一緒にやるという試みをやったりしてまして。それを

やってよかったなと思うのは、さっき鎌倉さんもおっしゃったと思うんですけど、学生を入れてくださった家はということですけどね、どこで寝ておられるとか、どこにでかい家具があるのかなんていうこともやっぱり自然にわかってくるので、家具固定だけじゃない効果もあるのかなんていうことを思いました。今の火の元点検なんかもそうじゃないかなと感じたところです。ありがとうございます。

では、真打ちということで、お待たせしまして申し訳ございませんでした。吉村さんから、特に私の手元にある、何といたしますか、台本のようなものには女性の視点とか、それから要援護者の視点というようなことを中心にお話しいただけたらなというふうにあるんですけど、ご自由にとということでお願いいたします。

【長野県防災会議委員、元松本市寿台公民館長 吉村幸代氏】

かしこまりました。吉村でございます。先ほどご紹介いただきましたように、私は昨年の春まで松本市教育委員会に属しまして、寿台公民館長を務めておりました。その在職中に長野県防災会議の委員募集という公告を見まして、公募で応募いたしまして、委員に委嘱していただいて現在に至っております。

その寿台という地区ですが、こちらの総合教育センターのふもとでございまして、車で10分ほど下ったところに開発された新興住宅地であります。40年ほど前に、働き盛りの同じ世代の人たちが一斉に家を求めて転居してできた、そういう新興住宅地ですので、40年たちまして、その同じ年代の方々が一斉に年をとられて、私の周りには高齢者、要援護者ばかりという感じになっています。

さらに、いろいろな生活を取り巻く課題も深刻化しております。県営ですとか市営といった公営住宅の常会と、それから個人持ちの住宅が混在するモデルのマンモス団地として出発した寿台ですが、生活弱者と言われる方々、それから買い物弱者、独居老人なんていう言葉も嫌な言葉ですが、そういう方たち、それから外国籍の住人の方たちも大変多いです。そうした地区で、私は6年間、地区の課題と向き合っていました。公民館は、一体何が担えるのだろうかという自問自答しておりました。

先ほどから、住民同士のつながりが災害に大変役に立つという共通した見解が出されているように思いますが、寿台のような新興住宅地は、地縁、血縁のないところですので、そういった、どうも隣同士のつながりが薄いように感じます。まずは住民同士が知り合って仲良くなること、そして絆が醸成されれば、それがいざというときには役に立つのではないかとということから活動をスタートいたしました。様々な取組を通じていろいろな、楽しいお付き合いの輪が広がってくるように、私は間に入って一生懸命努めてまいりました。と同時に、公民館というのは社会教育の場です。学びという機能を備えた地域づくりの拠点でもありますので、防災に関する学びを企画しなければいけないという思いに駆られておりました。

さて、平成23年3月11日、忘れもしないその日ですが、私は家族みんなで岩手県にい

て、東日本大震災に遭遇いたしました。それは今まで経験したことのない大変な揺れでございました。たちまち停電して真っ暗になった、あのマンモス都市の盛岡市。暖房も光も全て消えた町の寒いホテルのロビーで、寒さに凍えながら眠れない一夜を明かしました。もう松本には帰れないかもしれないと一旦は覚悟もしたほどの不安でございました。命からがら何とか無事にこうして帰ってくることができました。

松本に帰りましてすぐに決心したのが、「シリーズ わが町の防災を考える」という連続講座の立ち上げでございました。この「シリーズ わが町の防災を考える」という講座は、まず東北の被災地にいち早くボランティアに入られた方の経験談を伺って、東北の被災地に思いを馳せるという会からスタートすることにいたしました。そして地域の防災協議会にも共催をお願いいたしまして、様々な角度からみんなで一緒に地域の防災を考えるような機会にするようにしてまいりました。

印象的だったのは、私も住んでいる寿台の近くには、牛伏寺断層という有名な活断層が走っているんですが、信州大学で活断層を研究なさっている大塚教授をお迎えして、「牛伏寺断層の危険性について正しく知ろう」と題した講義、それから松本市の菅谷市長は、ご承知のとおり甲状腺がんの専門医であられまして、チェルノブイリの原発事故の折に医療支援に入った経験をお持ちです。その菅谷市長をお招きして、「福島原発による被曝被害のその長期的課題」と題したお話を伺ったことでした。公民館の大会議室いっぱいの方々が、熱心に、それは熱心に聞き入ってくださいました。ほかにも長野県政出前講座を幾度も利用させていただきました。県の防災指導員の先生方が、避難所運営ゲームですとか、それから災害時頭上訓練などといった、いろいろな趣向を凝らして学びを深めてくださいました。

こうして取り組んでいました地区の防災協議会の活動ですが、問題点が一つございます。それは年度が変わって役員が交代すると、せつかく学んだことが少しリセットされてしまうという部分です。防災の役員体制には、中長期的な視点が必要ではないかなと感じています。

私はこうして様々な経験を通しまして、暮らしの安心、すなわち防災・減災ということをお大切に考えようということを公約に掲げまして、この春の統一地方選挙に立候補いたしました。松本市議会議員に当選させていただきました。明日から初めての6月定例議会が始まります。新人議員として初登壇いたしまして、防災分野における男女共同参画の推進ということをお願いしたいと考えています。少子高齢化が深刻です。もはや地域は女性の力なしには存続していけないときが来ていると思います。この防災という大きな問題にも、どうか女性の視点をたくさん活用していただけたらと考えています。以上でございます。

【京都防災研究所巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございました。吉村さんから、たくさんの、地区との向き合い方とか、論

点を出していただきました。最後のところで、防災における男女共同参画と、これ確かに、今、国の内閣府のほうでも新しい枠組みを立ち上げて後押ししようという動きがあるようですので、そういったまた動きとも連携して、是非お進めいただきたいと感じました。ありがとうございます。

手元のタイムテーブルによると、もうちょっとフロアの方からご意見を伺うというような時間になっているんですけれども、少しだけタイムテーブルを延長させていただいて、今、テーマ1ということで、その地域防災力の向上、必要なことということでお話を伺ってきたんですけれども、もう一つ、今日は消防団という大きなテーマを掲げております。特にその自助・共助の中核を担う組織としての消防団の益々の充実強化ということで、そういうテーマで、ここからはちょっと順番を変えまして、まずその分野、リーダーシップをとってこられました秋本さんからスタートして、武儀山さん、鎌倉さん、吉村さんに伺って、最後に知事、阿部さんに一言いただいて、タウンミーティングとしての位置付けも持っているということですので、会場のほうにちょっとマイクをお渡ししたいと思っております。

ちょっと大分時間が、私、何分延長していいのか、事務局からもうすぐ耳打ちに来られるだろうなと思いつつ待っているんですけれども、時間通り終わろうと思うと相当タイトになってきていますので、恐れ入りますがちょっと皆さん短めにということで、時間が来て恐縮なんですけれども、お願いできればと思います。では秋本さんからお願いします。

【公益財団法人日本消防協会会長 秋本敏文氏】

今、お話がありましたように、「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」という法律が、私ども申し上げたことが基礎になっているかと思っておりますけれども、長野県の務台国會議員さんがプロジェクトチームの事務局長などもやっていただいて、成立をいたしました。その法律の中で、消防団が大事だということは、はっきり法律の中に書かれたというのは、今までにないことであります。いろいろな意味で、これ、大事だというのは、もう今日の皆さん方には改めて申し上げることもありませんが、私はちょっと活動の意味合いから言いますと、さっき情報発信ということを行いました、いろいろなその災害なんかの事例を見ると、例えば去年の8月に広島で大きな土砂崩れがありました。広島市内、大雨警報が出ていますと言いましても、広島っていうのはそんなに雨が降るという意識がありません。ですが、ものすごい大雨がありました。それからその前に伊豆の大島で大雨がありまして、土砂崩壊がありました。あれも、そんなに降ると思っていなかったはずなんです、800ミリ降ったという話であります。

ということは、今までの常識の中ではちょっともう考えられないような気象状況というのは出てきているということでもあります。ということになると、何々市において大雨警報、局地的な大雨がと言っても、実際自分のところがどうなるのかということについ

て、人の言うことだけで判断するというのでは、何かその気にもなれない。そうなってくると、本当にこの地域ではどうなのかということについて、もっと情報を確認することもしていかなきゃならない。それを今やろうと思えば、ある程度できるようになってきているんですね。というようなことを持ちながら、それぞれの地域の中でどう対応するか、これはまさに、今日、事例紹介がありました二つの事例がまさにそうなんです。大きな災害でありましても、所詮はそれぞれの地域でどうするかということになってくる。だから地域の対応をどうするかということが、どんな災害であろうと一番根っこになるということだと思います。

ですから、これから先、そしてそのときに消防団が中核になるということは、もう当然だと思います。消防団自身が何をやるかということについても、従来ずっとファイアマンということでやってきましたが、ファイアだけじゃなくて、レスキュー関係のことをやるのが、いわばもう当たり前になってきていると思わなければいけない。情報発信のことを言いましたけど、そうなってくると、消防団というのはそういった活動ができるような装備が今まであったのか、なかったです、一般的にはなかったです。新しい法律ができて、こういったことについてももっと改善しなければいけない。

平成27年度は、新しい法律ができて実質初年度である。今こそというようなことを私も全国に申し上げましたが。先日、全国の消防団の予算状況を調査しましたら、半数近くの消防団の回答ですけれども、平成25年度に比べて消防団の装備関係予算は、全体として7割増になっています。7割増です。そして、それは全国の恐らく傾向を示していると思います。中身についてはまだわかりません。ですが、とにかく消防団について、いろいろな活動をしなきゃいけない。そして、そのためには装備が必要だと、装備の改善をしなきゃいけない、基準改正をしましょう。そして予算、それぞれの市町村の予算が7割増ということになっています。これは、恐らく皆さん方が、消防団の皆さんも頑張って、そしてそういう実績を上げた。だけど、これ7割でおしまいということに恐らくならないと思います。これから一体どういうものが必要なのか、どういう活動をするのか、そういうことを通しながら、消防団員の確保にプラスになり、そして皆さんにも消防団が大事だということを知ってもらう。そういうプラスに、プラスに、プラスに回転をさせていくといったようなことが、これから私は必要なんじゃないかと思えます。いろいろありますけど、もうこれ以上はやめます。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ご協力ありがとうございます。大きな災害でも、あるいは大きな災害だからこそ、小さな地域での消防団の活動が大事と。それからファイアだけじゃなくてレスキューもと、あるいは情報の受信だけじゃなくて発信もというような、非常に消防団の活動の将来にとって大事なメッセージをいただいたと思います。

さっき鎌倉さん、武儀山さんの順番にお聞きすると言ったんですけれども、消防団の

話だったのでちょっと順番を入れ替えて、武儀山さん、今のお話を聞かれて、受けとめとか、あるいは自分たちこんなふうにしたというようなことがありましたら。

【南木曾町消防団長 武儀山真史氏】

消防団の充実強化ということで、確かに装備品、今、会長おっしゃられるように、昨年の災害を経験して必要な装備品が揃っていない部分も私どももありました。それをすぐに予算を組んでいただき、必要なものは揃えていく形をとって、随時、入ってきております。ありがとうございました。

それで、やっぱり一番、私たちが一番問題にするのは、人員というか、消防団員の確保でして。年々、ほかの町村さんはまたいろいろ形があると思いますが、南木曾は45歳が一度定年で退団をするという形をとります。それであと4年間は任意で機能別消防団員として49まで入っていただきます。退団された皆さん、ほとんど49歳まで入っていただきますが、それでも300人を切る人数でした。

そして、毎年、やめられる方が15人、20人で、入ってくる子たちが6人、7人の状態だったんですが、今年は23名の新入団員に入っていただきました。南木曾も久々の新入団員で、上は38歳から下は19歳まで。38歳、36歳の子たちに聞くと、去年、災害が起きたと。僕たちは被災者として避難をしていたと。だけど自分よりも先輩、後輩、または同級生がヘルメットをかぶって活動しているのに、避難所で何もできない僕たちが何かすごく悔しかったというような思いで、そういう子たちが23人ぐらいいるんですね。若い子たちがたくさんいますので、災害が起きたのが本当はよくないんですが、そういう意識の改革になったということもすごく、こちらとしては嬉しい形ですし、それを今後、どういうふうにつなげていくかという形で、町の飲食店やそういうお店関係には消防団募集のポスター、また町の配布物には募集していますとか、そういうふうには、あと各団員が声をかけたりというような活動はしています。今、予算とかも組んでいただいておりますので、まずは、若者はたくさんいますので、そこをどういうふうには、今、現役の私たちが団員を確保していくかということが、また充実した強化につながっていくんじゃないかと思っています。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

すごいですね、20数名の新入団員があったということで、本当すばらしいことだなと思います。鎌倉さん、何かまたちょっと、後にしっちゃって申しわけないんですけど。

今、消防団の充実という話があって、吉村さんのお嬢様が女性消防団員を務めておられるのをちょっと伺ったので、今のお話に関係して、いつ頃からどんな動機で。

【長野県防災会議委員、元松本市寿台公民館長 吉村幸代氏】

女性消防団ではなくて一般団員でございます、地区の。娘が東京都内の大学を卒業い

たしまして、松本に帰りまして、地元の消防団に入りたいというふうに言い出したときには、私はいささか驚きましたけれども、引き止めることはできませんでした。なぜならば、先ほど申し上げたように、地区が高齢化しておりまして、周りに若い人たちがほとんどいないというふうに感じていた矢先でございましたし、消防団員が少なくて困っているという窮状を目の当たりにしていたからであります。娘は、おかげさまで一生懸命に取り組んで、平成22年の夏には、長野県消防ポンプ大会に指揮者として出場させていただいたり、その後も県の自主防災アドバイザーとしても登録させていただいて、防災という問題に一生懸命取り組んでおります。

私が日頃思いますのは、消防団はどうしても男子の牙城というようなイメージの、実際そういうところだと思えるんですけども。これから女性団員をどんどん増やしていただいで、人数の確保につなげていただきたいなと思うものですから、少し体質改善という失礼な言い方ですが、少し思いを変えていただく部分も必要かなと。これからは、子育てもしながらお母さんたちが消防団員として活躍できるように、育児休暇ですか、出産休暇ですか、そんなものも考えていただかなくてはいけない時代が来るのかなと思っています。

いずれにしても、今、我が地区で見ていると、消防団の課題は、消防団員だった方たち、OBの活用、それから女性団員の活用、それしかも生き延びる手立てはないのかなと感じております。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。武儀山さん、南木曾は、今、女性はいらっしゃるんですか。

【南木曾町消防団長 武儀山真史氏】

はい、今、うちは8名女性団員がいます。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

少しでも増えていくといいなと思いました。

鎌倉さん、お待たせしてすみませんでした。もちろん地元での活動、自主防災の活動においても、消防団、すごく大事な役割を果たされたし、果たされていると思うんですけど、一言いただければ。

【元白馬村堀之内自主防災組織会長 鎌倉宏氏】

先ほども事例発表の中でお話ししましたが、私も消防団の経験者であります。そういった人たちがほとんどは自主防災の組織の中に入っておられますので、やはり経験をしていた人たちが一堂に会して行動をとると、非常に大きな活動になるということが、今回の証明になったと思います。ですので、消防団プラスOBですね。私たちが一

緒になって行動したことによって、そういう早期発見、早期救出につながったと思いますので。

ですので、消防団をやめたからじゃなくて、やっぱりやめても自分たちのところは自分たちで守るという意識の中で、一生懸命やっていただければと、そんなふうに思います。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございました。では阿部さん、知事、お待たせいたしました。少し時間的余裕があるという、事務局からも伺いましたので、よろしく願いいたします。

【長野県知事 阿部守一】

消防団について、長野県の状況、先ほども話がありましたけれども、毎年、減少していると、これ長野県全体の人口が減少していますが、それよりも上回るペースで消防団員の数が減少していると。平成26年で3万5,000人ですが、ちょうど10年前、平成16年だと3万9,000人ですから、4,000人弱ぐらい10年間で減っているという。何とかこの消防団員を確保しなければというのは、我々、そして消防団、市町村の皆さん、共通の認識だと思います。ただ、その反面、女性消防団員は、少しずつではありますが、着実に毎年増えてきています。女性が頑張っているということ、26年の長野県内の消防団員数が933名になっていますから、もうちょっとで約1,000名という状況です。

そういう中で、私も、毎年出初式で、それぞれちょっと順番で行かせていただいて、挨拶させていただいていますが、いつも申し上げているのは、消防団活動は地方自治の基本だという話をさせていただいています。秋本大先輩が隣にいるんでなかなか話しづらいですけど、私も地方自治をずっと仕事にしてやってきました。やっぱり自分たちのことは自分たちで考えて、自分たちで行動しましょうというのが地方自治のあり方の基本でありますし、まさにそれを実際の形で体現していただいているのが消防団の皆さんの活動だと思っています。

そういう意味で、消防団の活動が弱くなると、やっぱり地域の自治力、先ほど鎌倉さんの発表の中にもありましたけれども、地域の力というのが、私は長野県にとっての防災力の基本であると思っていますので、そういう意味でこの消防団のパワーというものを維持して、そして発展させていくということが、県としても果たすべき役割だと強く感じています。

そういう意味で、先ほどもちょっと申し上げた消防団を応援してもらっている企業の皆さんに減税措置を講じてきていますし、そして入札等でもそうした企業は配慮するというのを検討してもらっています。そして、今年度の予算の中で新しく応援ショップ、消防団の皆さんにカードを発行して、それを持っていくとお店で割引してもらえる、あるいは特典をつけてもらえる、そういうようなことを県全体に働きかけて、これ一部の

市町村はもう既にやられているようですけれども、県として取り組んでいきたいと考えています。

是非消防団の皆さん、あるいは関係の皆様方には、これは単に特典がありますということだけではなくて、地域の皆さんに消防の重要性、消防団の役割、そうしたものを認識してもらう機会にもしていかなければいけないと思っていますので、是非一緒になってPRして、一緒になって応援していただくお店、企業の皆さんをどんどん広げていきたいと思っています。

これからも県としては、消防協会、あるいは各消防団の皆さんと一緒に、この消防団員の確保、そして消防団の様々な活動の活性化の支援に努めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。それではここまで・・・どうぞ、どうぞ。

【公益財団法人日本消防協会会長 秋本敏文氏】

団員確保のことに関連して、ちょっとだけ申し上げさせていただきます。

東日本大震災、平日昼間、そのときに現地にいる消防団員の方がいかに少ないかということも痛感をしました。それで、これからどうするかというときに、一つはやっぱり、さっき吉村さんからお話しありました、女性というのが大きな柱になり得るんだろうという意見であります。それで、日本は、今、2万1,000人余りの女性消防団員がいますが、世界各国、やはりそれぞれの国なりに女性がいます。ただ、それぞれみんな共通する、かなり共通する課題を抱えておりますので、去年9月に、世界各国、8カ国、日本に集まってもらって、女性消防団国際会議というのをやりました。

問題の一つは、女性に何をやってもらうかなんですね。日本の場合は二通り大きくあります。女性ならではの活動、応急手当の普及だとか、火の元についての啓発とか、というものに限定するということと、もう一つは、男性と同じ活動をやってもらうということとあります。これ、世界各国も二通りあります。そしてやはり方向としては、やっぱりもう女性だからこれしかやらせないじゃなくて、やはりできる人はできることをやると。それは男女に関わらずだというような方向に、だんだん進んできているというのが一つ。それからもう一つは、どうしても男性中心社会なものですから、いろいろな設備が男性本位になっている、これを何とかしなければいけない。こういう二つが世界の課題。そしてそのことを日本としてもちゃんと受けとめながらどうするかということで、今、やってきているんです。

それからもう一つ、消防団の応援の店の話は、知事が非常に熱心にやっていただいているんですが。全国、どういうふうになっているかというのを、去年、調査したところで、既に実施済み、それから実施に向けて検討しているというところが、大体半数をち

よっと超えました。実は日消では3年ぐらい前から、こういうことでいろいろなところの動きを全国に情報提供してきたんですが、こういうようになってきています。

あともう一つ、これでぐっと行くようになってくれば、全国どこでも消防団員は、消防団応援の店でそのサービスを受けられるんだというようなことにすると、全国の連帯感もますます大きくなる。そのことについてどう思いますかといったようなアンケートが、近々、それぞれ消防団に行くはずですので、回答してください。

というようなこともしながらですが、いちばん根っこになるのは、消防団というか、消防防災体制としてどういう体制を組むかということがいちばん根っこになると思います。高齢化とか、人口減少とかっていう中、これからの時代にどういう体制を組むかというのがいちばんの根本だと思います。片方のほうで、消防団活動もますます多様化してくる。多様化する活動を支える多彩な人材をどういう方法で確保していくかということをしていかなければならない。そうすると、多少いろいろな工夫をしなければいけなくなるんじゃないかなというように思いますので、これらについては、また消防団の皆さん方ともご相談をしながら、方向をつくっていくようにしたいと思っています。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。2番目の話題、消防団の充実ということについて、もうまとめになるコメントをいただけたような気がいたします。

では、まだまだちょっと話し足りない方もいらっしゃると思うんですけども、お時間になりましたので、パネラーの方からのご発言、一旦ここで閉じさせていただいて、お時間まいっているんですけども、少し余裕あるというふうに事務局から言われたので、ここからちょっと司会を進行役の方にお戻しをして、会場のほうからの意見を伺うということでございますね。

【消防課長 西澤 清】

長野県庁では、阿部知事以下、出席をいたしまして、県民の皆さんから直接意見を聞くような、そんな機会を設けております。今回のシンポジウムにおきましても、会場の皆さんとキャッチボールをしていきたいと思っております。会場で挙手をいただいた方の中から指名をさせていただきますので、本日の議論に対するご意見、感想などの発言をお願いしたいと思います。なお、できるだけ多くの方からご意見を伺いたいものですから、恐縮ですが、お一人様、1分以内のご発言ということでお願いをしたいと思います。

それではご発言のある方、その場で挙手をお願いしたいと思います。では階段席の真ん中の1番前の列の方、どうぞ。

【参加者A】

今、消防団、あるいは消防署、警察、いろいろな各団体があるんですが、我々も地元

で自主防災会の一員として現在活動をしているんですが。

防災アドバイザー、あるいは防災士の立つ位置というんですかね。消防団との関わり方、あるいはその連携の仕方というのが、いい例、あるいは実際の南木曾の場合あたりでも、自主防災と消防団、あるいは市の関係のお付き合いの仕方とか立ち位置を、どんなふうな割り振りをしてやっていたか、その辺のところをちょっとお聞きしたいと思います。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。では、そうですね、では南木曾のほうから武儀山さんにお答えいただきましょう。

【南木曾町消防団長 武儀山真史氏】

実際、災害のときは、自主防災という形では、区長が中心となってその住民の人たちを、避難をしたり、そのケアに当たったという。そこに消防が協力するという形で支援物資を届けたり、または警備とか、そういうふうに入って、最初はもう区長さんが一応全ての権限を持っている形では、実際、災害の避難現場ではそういうふうになっております。

また、普段、火災とかになると、今度、私たちのほうが、そこに、主導権という言い方はおかしいですけど、そこに広域何分署の皆さんと入って、私たちがいて、逆にそこに、自主防災の人たちは後援支援をするという形というふうな動きをしていただける形になっています。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

いかがですか、もうそれでよろしいですか。知事にも伺ってみますか。

【参加者A】

ありがとうございました。防災士の立場というのは、防災アドバイザーの立場というのは、またどういった。

【南木曾町消防団長 武儀山真史氏】

南木曾では、防災アドバイザーという方というのはいないですね。そういう方をお呼びして講演とかは開いていただいて、それをみんなで聞いたりするという形になります。

消防団としても、その一つの協会の中でそういうような講習会だとか、そういう勉強会はやっていますが、南木曾独自で防災アドバイザーという方は、ちょっと私は存じ上げておりません。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。秋本さんからちょっとコメントをいただけるようなのでお願いいたします。

【公益財団法人日本消防協会会長 秋本敏文氏】

防災士ということについてお話がありましたから、ちょっと私のほうから申し上げますが。防災士というのは、法律に基づく資格でも何でもないですよ。防災士機構という組織で、防災について勉強してもらい、そしてその課程を修了したら防災士ということにするということにしています。ただ、それはしかし、それはそれで皆さんが勉強されるというのは悪いことじゃないと思いますから、それはそれでやったらいいじゃないですか。

ただ、私もちょっと違った観点から。ということは、日本全国、全体でどういうふうに防災体制をつくるか。まさに、今、お話がありました自主防災組織というのは、統計数字で言いますと、メンバーは何と4,000万人いるということになっているんです。全国の市町村にそれぞれ自治会、町内会で、防災関係をやっていたりしている方々というのがどうもその基礎になっている。ですから、実態としては極めてまちまち。今までほとんど手が出せなかったんですが、実は、去年初めて、新しい法律ができたということでもあるので、自主防災組織のリーダーの方々、各県から推薦いただいた方々だけで数は少ないんですけど、100人ぐらいの方に集まってもらって、それぞれの自主防災組織でどういうふうにやっておられるかという情報交換というのを、初めて去年、やりました。今年もやろうと思います。

そういう中でやってみると、いろいろなやり方をやっぱりやっておられると思います。そして、その自主防災組織のリーダーの方が、女性防火クラブの皆さん、あるいは子どもたち、あるいは消防団といろいろな連携を取りながらやっている。私も新しい法律ができて、これから何か詰めていくという中で、例えば地区の防災計画をつくるといったようなことが法律改正の中で入りました。地域の防災、県とか市町村とかいうだけでなく、この地区の防災計画をつくらうじゃないかということになってきています。そうすると、この地域で、この地区で、想定される災害というのはどんなものがあり得るのか。そしてそういうようなことが本当に目の前に来たというときに、どういう対応をしていくのか。そして本当に避難しなきゃいけないんじゃないかということになったときに、では消防団だけでも足りるのか、恐らく足りない。それはやっぱり地域の人たちと一緒に協力して、そして避難をするということにしていかなきゃいけないんじゃないか、というようなことに恐らくなるだろうと。

ということは、自主防災組織の皆さん、あるいは消防団の皆さん、行政の皆さん、そういう皆さん方をひっくるめて、この地区全体としてどう対応するかといったようなことを現実にもいろいろ相談を始める。時々、さっきお話しありましたような避難訓練

など、いろいろな訓練をするというような行動の積み重ねの中で協力体制が出てくる。それは、自主防災組織であろうと、皆さん、一緒になって入っていくということに、私はそういうふうを持って行って、その中からそれぞれの形ができてくるんじゃないかなというように思います。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。ではよろしいですね。

【消防課長 西澤清】

ほかにご意見等のある方、いらっしゃいますでしょうか。挙手をお願いします。はい、それでは1番左側の後ろから4、5列目ぐらいの方、どうぞ。

【参加者B】

本日は、いろいろと有意義なお話をお伺いすることができまして、ありがとうございました。

先ほど秋本会長のお話にもありましたが、女性消防団員、団員の確保対策という部分で、女性団員の活動について、世界会議、国際会議を行われたというような部分で、女性ならではの活動をしている団員もいれば、一般団員と同じように活動している団員もいるというようなお話がありました。

私自身が、一般団員として入団して、男性団員と全く同じ活動をしてここまでまいりました。入団当初は、消防団、女性は要らないだろうというような思いを持たれて一緒に活動している方が大半だったと思うんですが。活動の中で、やはり地域の皆さんがまず消防団に興味を持っていただいたというのをすごく感じることができましたし、また消防団の中からも考えが変わりまして、本気で地域のことを考える、消防団のことを考えている女性がいるんだと受け止めてくださって、ここまで育ててくださって、本当に信濃町の皆さんの力が大きいと思っております。

そして、信濃町消防団では、今年度、女性隊が発足しまして、本当に私が入った約10年前ですが、今、考えられないような状況に変わってきていますし、地域の皆さんの考えも、また本当に消防団に対する理解、地域の防災への理解も深まっているのではないかなと感じております。

先ほど、そうですね、いろいろな設備の整備などというお話もありましたが、実際、やはり活動してまして、女性が活動しにくいなというような、現場で、全ての災害現場に出動しているわけですが、その中でやはり活動しにくいと感じる部分は多くありました。これは本当に要望になるんですが、またそういった女性団員もいるということで、何か整備、または啓発活動ですとか、そういったものをまた企画していただいたりというようなことがお願いできればなと思ひまして、発言させていただきました。以上

です。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。では、これも秋本さんからちょっと一言。

【公益財団法人日本消防協会会長 秋本敏文氏】

私ばかりじゃよくないかもしれませんが、今年10月に佐賀で女性消防団員の皆さんの全国大会をやります。そのときにもシンポジウムをやろうかと、今、予定しているんですけれども。そのテーマは、地域防災力と女性消防団員ということにしようかなと思っています。大きなテーマが地域の体制をどうするか、その中で女性の皆さんにどういう役割を果たしていただくのがいいのか、どういうことをやりたいのかといったようなことについて意見交換をしていただいて、そしてそういったものをやっぴり着実に進めていきたいと思えます。

さっき、私、各国、国の中でもいろいろな国が、女性はこれしかやらせない、そういう国と、そうじゃない国とあると言いましたけど、限定している国、例えばロシアなんかですけど、やっぱりそれではだめだという空気がかなり強くなってきている。だから世界的にそういう傾向にあると思うんですが。男性の消防団のほうが、私らもそうですけど、気になるのは、危険な場面に行っけがなんかは絶対にさせたくないという思いが強いはずで。

ですから、そういう、女性の皆さんがいろいろな活動をされるというときに、安全を確保するということについては、恐らくもうみんな一生懸命それを考えた上で、そして安全に活動できるようにということではやるはずですが。女性の皆さんも、そういうことで何かいろいろな新しい活動をやるということになったら、訓練なんかも恐らく今までの経験でいうと相当おやりになると思いますが、そうやってお互い安全を確保しながら、本当に地域の防災体制を強化する上で、男性も頑張る、女性も頑張るというようなふうには持っていかなければいけないだろうと思えます。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございました。よろしいでしょうかね。

【消防課長 西澤清】

それでは、大変恐縮ですが、時間も押してきてまいっておりますので、あとお一人の方からご意見等いただきたいと思いますが、ご発言のある方、いらっしゃいますか。

それでは、真ん中の階段席の前から3列目の方、お願いします。

【参加者C】

今日は大変勉強させていただきまして、ありがとうございました。うちの南箕輪村は、男女共同参画都市宣言を、県下で2番目にさせていただきまして、本部長も女性であります。それから女性団員も29名おまして、役場の職員を初めとして、率先して女性が盛り上げよう、地域を守ろうという観点で頑張っております。一応、PRさせていただきました。ありがとうございます。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。今、PRだけということでしたけれども、これ、是非ちょっと吉村さんに一言、はい、受けていただければと思いますけれども。

【長野県防災会議委員、元松本市寿台公民館長 吉村幸代氏】

南箕輪村の皆さんのご活躍は、以前から耳にしておりました。ライバルとして、同志として、一緒に頑張っていけたらと思います。今日はありがとうございました。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。

【消防課長 西澤清】

それでは、会場の方からの意見はこれまでといたしまして、矢守先生にマイクをお返しして、パネルディスカッションのまとめに入っていただきたいと思います。お願いします。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

では、もう最後のステージということで、最後に1分ずつということで、お時間超過していますのでお願いしたいと思いますが。

今回は、最後は阿部さんに、知事に取りまとめをお願いしたいと思いますので、吉村さんから、1分ずつということで短いんですけども、最後の一言ずつということでお願いいたします。よろしくをお願いします。

【長野県防災会議委員、元松本市寿台公民館長 吉村幸代氏】

防災・減災は、意識と知識の両輪でということをお今日は強く感じました。地域の中でキーパーソンを育てていくこと、当然、消防団の皆さんは、その地域防災の要であり、キーパーソンであられると思います。それから女性の力、女子力をもっと活用してほしいということも感じました。

自分自身の反省を踏まえて考えますのは、喉元過ぎれば熱さ忘れるという言葉がありますが、震災の体験、それから最近起こっている大きな災害、他人事とは考えずにこ

れからも一生懸命考えていきたいと思いました。今日はありがとうございました。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。武儀山さん、お願いします。

【南木曾町消防団長 武儀山真史氏】

自助・共助ということを考えると、私はやっぱり一人一人の意識の改革が必要だと思います。そして、今日、ここにおいでの方皆さんも、それぞれ消防をやられたり、消防のトップをやられる方々が多いです。そういう方々がまず帰られて、一つ、自分たちの地域、またはその町村でそういうような、今日のことをまた伝える。同じようなことをまた開催する。それがまた地域に降りていく。それがまた一つの地域に降りていく。この積み重ねが、絶対に僕はつながりが大事だと思いますので、実際、災害を経験した町です。それでつながりが本当に大切だということをいちばん意識していますので、今日は私も非常に勉強になりました。ありがとうございました。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。鎌倉さん、お願いいたします。

【元白馬村堀之内自主防災組織会長 鎌倉宏氏】

私も同じでありまして、やっぱり自分たちのところで、自分たちはみんな一生懸命取り組んでやる。そういったことが、災害のときには大きな力になるということを感じております。消防もそうですし、自治体消防もそうです。みんなで一生懸命何とか考えて勉強しながら、こういったところにまた多く参加していただいて、私どもも勉強して頑張っていきたいと思っております。今日はどうもありがとうございました。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。秋本さん、お願いします。

【公益財団法人日本消防協会会長 秋本敏文氏】

さっきも申し上げましたけれども、このような県大会は全国で初めてです。阿部知事のいろいろなお気持ち、お考えというのが、こうやって形になっているんだろうと思います。これから先、この大会の成果・結果というのを、県下全域でも、そしてまたそれぞれの市町村、それぞれの地域でも、発展をさせていかれるということを心から期待いたします。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございます。では阿部さん、最後に取りまとめ、総括的なコメントをお願いします。

3 知事 結びのあいさつ

【長野県知事 阿部守一】

それでは、今日は長時間、ちょっと予定の時間をオーバーしていて大変申しわけございません。先ほどのご意見も、本当はもっといろいろな方にご発言いただきましたかったんですが、時間が短くて失礼いたしました。

防災アドバイザー・防災士、恐らくご質問いただいた趣旨は、もっとしっかりいろいろな位置付け、活躍の場を考えろというご指摘だと思いますので。我々も防災・減災にはいろいろな皆さんの力を結集しなければいけないと思っていますので、それはまたしっかり検討させていただきますし、女性の活躍の部分については、今、6月県議会に向けて補正予算の検討しているところでもありますけれども。少し、この消防に限らずでありますけれども、女性の活躍推進に向けていろいろな取組を県でやっていこうと。

例えば働き方でも、今、どこの建築場所でも女性の方々が随分活躍するようになった。ただ、消防団の先ほどのご発言と同じように、私も女性の建築現場の方と意見交換すると、やっぱり働く場所としての環境としては男中心社会で組み立てられているので、いろいろ不都合もあるということも触れられていますので。そうしたこと、関係の皆様方と一歩一歩改善していくように取り組んでいきたいと思えます。

それで、私のほうから、最後、皆さんに、少し今日の話を受けてお願いを幾つかしたいと思えます。三つお願いしたいと思えます。

一つは、先ほど鎌倉さんのお話に出てきたんですが、災害時の住民支え合いマップ。これ、是非それぞれの市町村で、まだつくられてないところがありますので、皆さん帰ってちょっとチェックしてもらって、つくってないところは是非つくろうよという声を上げてもらいたいと思えます。県としては、市町村に対してつくってくださいねというお話を、今、積極的にさせていただいているところではありますが、なかなか、「はいはい」ということにはなっていない部分もあるようでもありますので、是非、今日、皆さんと問題意識を共有させていただいて、地域にどうなったからこういうものが必要じゃないかと、地域の支え合いマップ、必要じゃないかという声を出してもらえればありがたいと思えます。

それから2点目でもありますけれども、皆さんのところへ資料をお配りしているかと思えますが、県の出前講座というのをやっています。いろいろな分野、呼んでいただければ、県の職員、あるいは県からお願いしている方々が伺ってお話をさせていただいていますが。是非この防災の話は、多分やっぱり又聞き情報だとなかなか切実感、実感がわからない分野だと思います。是非、この出前講座、積極的に利用させていただいて、先ほど

も吉村さんも活用していただいていたということでありありがとうございます。是非それぞれの地域で、この県の出前講座、積極的に使って、この防災・減災の意識を広めていただくことに使っていただければと思います。

それから最後になりますけれども、今日、消防団の方も多いですし、自主防災組織の関係の方も多と思いますけれども。我々、県は行政として責任を持って行政の守備範囲を担当しています。是非、消防団、そして自主防災組織、地域の皆さんにおいては、それぞれの地域をどうするかということ、もう一回、新しい視点で考えていただければありがたいと思います。特に、例えば女性の消防団員をどう受けとめていくのかみたいな話とか、あるいは秋本会長からもお話しありましたけど、情報の、単に受け手側ではなくて積極的な発信側にどうしていけばできるのかとか、いろいろな、消防団、自主防災組織においても、新しい取り組むべきテーマが私は出てきていると思っています。是非そうしたことに正面から向き合っていただきたいと思いますし、また皆さんのそうした取組を県としても全力で応援していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

ちょっと時間になりましたので以上にさせてもらいますけれども、本当に今日は長時間お付き合いいただきましてありがとうございます。これでコーディネーターのほうへマイクをお返ししたいと思います。ありがとうございました。

【京都大学巨大災害研究センター長 矢守克也氏】

ありがとうございました。では以上をもちまして、パネルディスカッションを閉じたいと思います。

災害が頻発するというのは、100パーセントよろしくないことなんですけれども、あえて前向きに捉えれば、今、知事からもお話がありましたように、切実感を持ってお話しくださる方が周りにたくさん長野県はいらっしゃるということでもありますので、そうした方々の体験に耳を傾けながら、自助・共助力のアップの一つの機会としていただければと感じました。

それでは、今日、すばらしいお話、話題提供、そして分析等々お話しをくださったパネラーの皆様に、最後に拍手でもってお礼をさせていただいて、パネルディスカッションを閉じたいと思います。ではどうも皆さんありがとうございました。

4 閉会

【消防課長 西澤清】

ありがとうございました。矢守先生、パネラーの方、先ほど矢守先生の拍手なかったものですから、矢守先生始めパネラーの皆さんにもう一度大きな拍手をお願いします。